42回生　気になる記事を共有しよう　2020．8．18分

文化

落語的見聞録

桂文珍

今年のお盆は皆さま、どうなさいますか？　御先祖さまがこの時期戻って来られるというのに、故郷に帰りたくともコロナ禍、家族の健康、安全のことを思うと、残念ながら帰郷を見送る方も多いのではないかと思います。

こんな時代になろうとは…

ふる里のお父さん、お母さんは、さだまさしさんの名曲「案山子」のごとく、子どもは元気にしているのか、お金はあるのか、仕事はうまくいっているのか、孫の顔も見たいなどなど、思いは募る一方。スマホで顔は見られても、やっぱり互いに会いたいと思うのが人情でしょう。

まさか、こんな時代になろうとは。お正月やお盆には昔、奉公に10歳や11歳で出ていった子どもが戻って来る。これを昔、藪入りと言いました。

落語「藪入り」では奉公に出て3年目になる息子が、初めての藪入りで明日、帰って来る。両親は待ち遠しくて仕方がない。父親はうれしくて寝付けず、夜中の3時だというのに「おいおっ母ぁ、まだ夜が明けないのか」「まだ3時だよ」「でも、昨日は夜が明けたなあ」と、息子の帰りを待ちわびる。

「帰って来たら何をしよう。まず、風呂に行かせて、それから…」と、1日しか休みがないのに、日本一周しそうな勢い。朝になり息子が帰って来たが、うれしくてまともに顔を見られない始末。3年前とは別人のように成長している。取りあえず、お湯に行く。その間に母親がなにげなく息子の財布を見ると15円ものお金が入っている。いくら真面目に働いてもこんな大金を奉公人がもらえるわけがない。きっと悪いことをして手に入れたお金に違いないと、かわいい息子を問いつめると、ペストが流行していたために、店で捕らえたネズミを警察に持っていくとお金になり、それも1匹15円の懸賞に当たったのだという。両親はホッとし、父親が「心配したじゃないか。これからもご主人を大切に、これもみんなチュウ（忠）のおかげだ」と、よくできた噺だ。

ペストが流行った時代だった。今、コロナの時代、どんな落語ができるやら。ちなみにネズミの懸賞は、自らネズミを飼って増やし金にしようという者が出て、チュウ止になったそうな。いつの世も悪い者が現れる。クワバラ、クワバラ。

（かつら・ぶんちん＝落語家）

＝次回は9月10日＝

2020.8.13 神戸新聞

落語にはなりませんが
最近よく想います。
この状況 悪いのは
コロナの猛威なのか
それとも、人の油断、甘え
妥協なのか、と。
文句や、不安を口に
するなら、自分達のやる
べきことをまずやろうよ。
そろそろ自分達の行動
も見直すコロナのでは。